

# 満洲事変期の『少年倶楽部』

——「戦争支持」と「少年兵」へのいざない——

高野 宏 峰

はじめに

- 1 『少年倶楽部』と社会への浸透
  - 2 満洲事変期の『少年倶楽部』
  - 3 「軍国少年」の誕生と「少年兵」への誘導
- おわりに

はじめに

昭和の戦前・戦中を振り返るとき、無視できないのが、当時の国民の「戦争支持」という視点である。

伊丹万作は『戦争責任者の問題』の中で、「無計画な癡狂戦争の必然の結果として、国民同士が相互に苦しめ合うことなしには生きて行けない状態に追い込まれてしまったためにほかならぬのである。そして、もしも諸君がこの見解の正しさを承認するならば、同じ戦争の間、ほとんど全部の国民が相互にだまし合わなければ生きて行けなかつた事実をも、等しく承認されるにちがいないと思う。しかし、それにもかかわらず、諸君は、依然として自分だけは人をだまさないかつたと信じているのではないかと思う」とし、国民が互いに苦しめ、だましつづけたことの問題点を指摘した<sup>1)</sup>。

---

1) 伊丹万作『戦争責任者の問題』（『映画春秋』創刊号、1946年）。

当時の国民は慰問・愛国運動・戦勝祝賀などの形で「戦争支持」を体現した。もちろん戦時下に戦争反対の声をあげることは困難であったが、「戦争支持」は扇動や強制によるものでない面もあったと思われる。

本論文は『少年倶楽部』を通じて、国民の中の「戦争支持」の心性を探ることをめざす。『少年倶楽部』の読者は小学校高学年が中心であるが、『少年倶楽部』を子どもに読ませる（買い与える）のは大人であり、また学校などで評価されている点を考えれば、社会の空気を反映している面もあるのではないか。この動きが鮮明に現れてくるのが、満洲事変である。軍隊・政府に加えて、満洲事変支持のキャンペーンを展開したのは新聞マスメディアであり<sup>2)</sup>、大衆もそれを支持した。マスメディアは「中国への軍事侵略という陸軍の政策に対して国民の支持を動員」<sup>3)</sup>した流れの一つであった<sup>4)</sup>。この動きは子どもを巻き込み、少年（少女）雑誌がその意識形成に大きな役割を果たしていた<sup>5)</sup>。昭和13年（1938）に内務省警保局図書課より「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が通達され、児童図書の国家的統制が始まり、少年雑誌等も戦時色にそめられていくのであるが、それ以前の昭和7年頃より、「戦争支持」の世論を形作っていた。その傾向の一端を『少年倶楽部』と読者の関係から見て行きたい<sup>6)</sup>。

『少年倶楽部』に関する研究蓄積は豊富であるが、その中で本論文に関わるものを挙げておく。佐藤忠男は、『少年倶楽部』が児童文学史上の業績としてほとんど無視されていた現状に異議を唱え、『少年倶楽部』が「中学を出ずとも出世はできる！」などの広告を掲げるとともに、少年を独立

---

2) 江口圭一『日本帝国主義史論』（青木書店、1975年）。是澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア』（世織書房、2018年）。

3) L・ヤング（加藤陽子・川島真・高光佳絵・千葉功・古市大輔訳）『総動員帝国』（岩波書店、2001年）。

4) 前掲2) 是澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア』。

5) 前掲2) 是澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア』。

6) 『少年倶楽部』昭和7年4月号の「久平新聞」には、「軍国の少年が読む雑誌」とあり、「雑誌報国」を自認している。

した一個の人間として扱ったことが少年にアピールした一つの要素であったこと、子どもに來るべき人生・社会に対する一つの態度を形成させる力をもっていたことなどを指摘した。岩橋郁郎は、『少年倶楽部』の読者投稿を分析して、読者獲得の状況や購読の工夫など『少年倶楽部』への読者からのリアクションの成立について明らかにし、『少年倶楽部』はその背景に「学校・教育」「家庭」の見える「教科書」と同質の雑誌であったこと、その方針を編集部が守り通したことなどを指摘した<sup>7)</sup>。成田龍一は、『少年倶楽部』における満洲事変の扱い方について考察し、戦時に入りゆく少年雑誌のもつナショナリズムは「深い知識」と「若々しい熱血」に触発されていること、さらに視覚的な画による知識と結びつけられナショナリズムが定着していくとする<sup>8)</sup>。是澤博昭は、『少年倶楽部』における満洲事変関連記事と満洲への日本学童使節の感想文などを分析し、満洲国へ派遣された子ども達が軍国主義的イデオロギーを自発的に身につけていたことと、当時圧倒的多数の子ども達が愛読した『少年倶楽部』『少女倶楽部』の関連を指摘している<sup>9)</sup>。金山泰志は、『少年倶楽部』昭和7年2月号の在満洲少年少女の満洲事変についての綴り方より、中国側の野蛮性の表現を読み取っている<sup>10)</sup>。

以上のように広く普及していた『少年倶楽部』が満洲事変支持を広め、読者もそのことに触発されていたことなどが明らかになっている。

本論文もその指摘に異論はない。もっとも、『少年倶楽部』の社会への浸透具合を明らかにするには個別具体的事例をつみあげなければ当時の空

7) 岩橋郁郎『「少年倶楽部」と読者たち』（ゾーオン社、1988年）。

8) 成田龍一「少年雑誌のなかのナショナリズム—『少年倶楽部』の世界」（『kotoba』2016年秋号、2016年）。

9) 是澤博昭「『少年倶楽部』と日本学童使節—軍国少年少女誕生の背景—」（『渋沢研究』第29号、2017年）。前掲2) 是澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア』所収。

10) 金山泰志「一九三〇年代の『少年倶楽部』に見る日本の中国観」（『メディア史研究』45、2019年）。

気を明らかにすることは困難であり、また戦争への「支持」が戦争への「志願」になっていく様子も十分に解明されているとはいえない。本論文では昭和7年における『少年倶楽部』の満洲事変記念特大号などを中心に取扱い、少年への情報伝達や少年たちの関心ごとを探りたい。

## 1 『少年倶楽部』と社会への浸透

### 1) 昭和7年の『少年倶楽部』

『少年倶楽部』は大正3年(1914)に大日本雄弁会(現講談社)から、創刊され、大正末から昭和10年代に全盛を誇った少年雑誌である。創刊時は15銭・160頁で、当時の他の少年誌の10銭・約110頁に比べ割高であった。3万か3万5千部程度の発行部数だったがその半分は返品が来たという<sup>11)</sup>。

『少年倶楽部』は「男の子を男らしく育てる雑誌」という特徴があり、「卑怯なことをしない」「一旦取り組んだら最後までやりとげる」ことが強調されていた<sup>12)</sup>。対象年齢は尋常小学校5・6年生を中心とし、さらに高等小学校や中学校生徒をも取り込んでいた<sup>13)</sup>。

本項は主として昭和7年(1932)の『少年倶楽部』を扱う。昭和7年正月号の発行部数は65万部となっていた<sup>14)</sup>。これは加藤謙一編集長のもと、長編小説の掲載や附録の充実により売り上げをのぼし、昭和6年1月から「のらくろ」の連載もはじまり、漫画の効果も合わせた結果であった。

### ◎昭和7年頃の『少年倶楽部』の長編小説・長期連載漫画

佐々木邦 軽快小説 「村の少年団」 (昭和5年4月～7年3月)

- 
- 11) 福田清人『児童雑誌変遷史』『少年倶楽部名作選』I(講談社、1966年)。
  - 12) 加藤丈雄『父 加藤謙一を語る 記念碑の建立に寄せて』(2010年)。
  - 13) 加藤謙一『少年倶楽部時代』(講談社、1968年)。前掲7) 岩橋郁郎『「少年倶楽部」と読者たち』。
  - 14) 前掲13) 加藤謙一『少年倶楽部時代』。

佐藤紅緑	海洋冒険	「少年聯盟」	(昭和6年8月～7年6月)
山中峯太郎	武俠熱血	「亜細亜の曙」	(昭和6年1月～7年7月)
南洋一郎	猛獸征服	「密林の王者」	(昭和7年1月～3月)
三上於菟吉	首山堡の激戦	「仰げ栄光」	(昭和7年1月～3月)
子母澤寛	劍俠小説	「江戸城危し」	(昭和7年1月～3月)
池田宣政	写真小説	「明るい教室」	(昭和7年1月～6月)
玉野祥吉	滑稽物語	「珍妙二人組」	(昭和7年1月～6月)
大佛次郎	武俠小説	「山を守る兄弟」	(昭和7年1月～12月)
野村胡堂	探偵冒険	「地底の都」	(昭和7年1月～12月)
土師清二	武勇小説	「万歳栗毛」	(昭和7年1月～12月)
佐々木邦	軽快小説	「わんぱく時代」	(昭和7年4月～12月)
南洋一郎	猛獸征服	「吼える密林」	(昭和7年4月～12月)
豊島與志雄	外国物語	「エミリアンの旅」	(昭和7年7月～12月)
野村愛正	友愛小説	「青空に歌ふ」	(昭和7年8月～12月)
山中峯太郎	武俠熱血	「大東の鉄人」	(昭和7年8月～8年12月)
田河水泡		「のらくろ」	(昭和6年1月～16年10月)

昭和7年の作品では、少年を主人公としたもののほか、超人的な成人主人公によりそう「少年」が登場し活躍しているものも多い。主人公や主人公側に少年を据えることで、同世代の読者との共感を呼んでいるのである。分野は時代小説・冒険小説など多岐にわたるが、「立志」「男らしさ」が強調され、友情・正直といった精神的な徳育に力を尽くし、「偉大なる人」になるという意気と気魄を少年の心に焼き付けるものであった<sup>15)</sup>。

15) 前掲2) は澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア』。『少年倶楽部』大正4年4月号に編集方針が掲載され、「(少年倶楽部を読むことを通じ)是非己は「偉大なる人」とならねばどうしても死ぬことが出来ない。草木と共に朽ち果てることは出来ないというところの、一生を通じてその児童を鞭撻するところの心棒を形造る」などとある。

表 『少年倶楽部』昭和7年各号

月	特集	表紙/口絵	附録	備考
1月号	新年特大号	輝く日本(齋藤五百枝画) 横網の土俵入り/世界一の大飛行船	軍艦三笠の大模型/北極探検大双六/熱狂大野球盤/日本一大画報/少年美談読本/漫画愉快文庫	
2月号	満洲事変記念特大号	少年飛行士(齋藤五百枝画) 敵の装甲列車を攻撃する我が飛行機(鈴木御水画)	エンバイヤビルデングの大模型	
3月号		軍用犬(齋藤五百枝画) 愛国号の勇姿(鈴木御水画)	満洲事変記念あはがき集/満洲物産早わかり地図/帝国勲章あはがき集	
4月号	愛国特大号	海国男児(齋藤五百枝画) 閑院宮載仁親王殿下と伏見宮博恭王殿下の御写真/少年倶楽部模型展覧会の壮観	われ等の愛国号の大模型	並んだ!並んだ! 附録の大模型
5月号	帝国海軍号	ひるがへる軍艦旗(齋藤五百枝画) あ、爆弾三勇士(今村嘉吉筆) /火蓋を切った聯合艦隊(樺島勝一筆)	軍神廣瀬中佐の銅像セット	
6月号	われ等の空軍号	世界に誇るわが九一式戦闘機の勇姿(齋藤五百枝画) 壮烈! 蘇州上空の空中戦(鈴木御水画)/帝国国防地図(伊藤幾久造画)	世界飛行館	少年航空兵になるには
7月号	漫画大博覧会号	大洋に叫ぶ(齋藤五百枝筆) 真柄直隆と匂坂吉政の一騎討(五姓田芳柳筆)/人体工場	偉くなる貯金箱/日本名将大鑑/燕グライダー	
8月号	冒険痛快特大号	ガスマスクをつけた我が騎兵(齋藤五百枝画) 勇敢なる水兵(高橋勝藏画)	少年倶楽部あはがき/オリンピック熱狂遊戯盤/オリンピックへ行く我が代表選手	
9月号	不思議大会号	荒鷲に乗る少年(齋藤五百枝画) 秋の虫いろへ(關口俊雄画)	魔法袋/のらくろゲーム	オリンピック記念一万名当選運動大懸賞
10月号	熱血運動号	がんばって行け!!(齋藤五百枝画) 真田大助の奮戦(岡吉枝画)	日本地理学習車/小型模型乃木大将の少年時代の家	オリンピック写真ニュース/オリンピック漫画ニュース
11月号	帝国陸軍号	盛装せる陸軍大将(齋藤五百枝画) 厳かな軍旗親授式(五姓田芳柳画)	飛行機を射ち出すカタバルト	
12月号	空の快男児号	落下傘の勇士(齋藤五百枝画) 壮烈!! 空中決闘(村上松次郎画)	動く高射砲セット	

『少年倶楽部』昭和7年各号の特徴は表の通りで、ここでは表紙・特集号名・附録を中心に提示した。岩橋郁郎はエポックになる事件の後に、それを反映する記事が組まれていることを指摘しているが<sup>16)</sup>、表からは日中全面戦争・太平洋戦争の時期を先取りするような特集が組まれるようになっていたことがわかる。ロサンゼルスオリンピック（昭和7年7月30日から8月14日まで開催）については10月号にその特集が組まれるなどしたが、満洲事変に導かれたかのように「満洲事変特別号」以外の号でも軍事関連記事が目立ち、多くの号が少年飛行士やガスマスクをつけた騎兵などで表紙を飾り、傾向としては軍事色の強いものとなっていた。

## 2) 誌友クラブにみる『少年倶楽部』の「社会」への浸透

本項では、『少年倶楽部』への読者投稿より、その評価を見ていくこととする。対象は昭和7年中各号の「誌友クラブ」という読者の投稿であり、前号・前々号の感想・反響をうかがい知ることができる<sup>17)</sup>。もっとも『少年倶楽部』の編集のもとで読者投稿が掲載されているわけで、肯定的内容のみに偏重し、客観性に幾分の疑問があるかもしれない。それでも、同時代の資料における評価として検討する余地はあると思われる。以下投稿記事の中から「読者増」「家族への影響」「学校との関係」について抜粋の形で紹介し、若干の考察を加えることとする。

### ◎「誌友クラブ」……読者増に関する投稿記事

- ・此の間僕等の学校で、どの雑誌を読んでゐるかを調べました。あとから聞いて見ると少俱の愛読者は二百人位居りました。(名古屋市)  
〔昭和7年2月号〕

---

16) 前掲7) 岩橋郁郎『少年倶楽部と読者たち』。

17) 前掲13) 加藤謙一『少年倶楽部時代』によれば、前日配達された読者からの通信を、翌朝編集全員に割り当てて配り、それに目を通してから仕事に取り掛かり、誌友クラブに掲載しないものでも、つとめて返事を書いていた。

- ・僕は今日近所の子供を集めて少倶大演習をやってみせました。昨日作ったばかりの愛国号はブン〜音を立て、走るかのやうにみえ、軍艦三笠は三十糶砲をぶつ放し、僕の作った装甲自動車・列車は、どかん〜と音を立て、又、奉天などへ愛国号がばくだんをおとすやうに見えて大変面白く、弟や、見に来た人は大はしやぎでした。四月号の愛国号は誰に見せても皆立派だなあとほめました。（静岡県）〔昭和7年5月号〕
- ・先月より故郷（岐阜県加茂郡東白川村越原）をはなれて岐阜の書店に来て働くことになりました。岐阜に来ておどろいたのは少倶の売行です。九月号もついたのですぐ店につんでおきますと、その日の中に売切れてしまつて買ひそこねた者がたくさんあつてかはいさうでした。（岐阜県）〔昭和7年10月号〕
- ・僕等の町で図書館を開きました。僕は少年倶楽部を二十一冊も出しました。次の日、行つてみると少年倶楽部が一冊もない外の雑誌が何冊もある、ふしぎだと思つて係の人にきいて見れば、少倶は評判になつてみなかりてゆきましたといひました。（宮城県）〔昭和7年10月号〕
- ・九月号の附録の魔法を近所の人にしてみせましたら直ぐにあてられました。近所の人達は一人残らず少倶の愛読者ですからね。（宮城県）〔昭和7年11月号〕
- ・僕達の組では五年の時六人でした愛読者が十人にふえました。喜んで下さい。少倶のおかげで僕は皆から選挙せられ級長になりました。（山口県）〔昭和7年12月号〕

『少年倶楽部』は、昭和2年正月号の発行部数30万、昭和6年正月号の発行部数65万、昭和11年正月号の発行部数75万部となり昭和初期に黄金期を迎えた<sup>18)</sup>。昭和7年3月号には「二月号売切れ日本中大騒ぎ」の記事が掲載され、本屋の「少年倶楽部といふ雑誌は恐ろしい雑誌です。近頃こん



なによく売れる雑誌はめつたにありません」との言葉を紹介している。

部数の増加については読者である少年たちの力も大きかった。希望者には少年倶楽部からポスターが送られ<sup>19)</sup>、熱心な愛読者には東京通信やビラが送付された<sup>20)</sup>。さらに読者をすすめた人の住所・姓名を知らせれば感謝状が送付された。読者の宣伝活動については、岩橋郁郎が、編集部による「久平新聞」などを通じた働きかけとともに、読者の「参加の幻想」により、読者が積極的に読者獲得を行っていると指摘している<sup>21)</sup>。

こうした活動などによる読者増を裏付けるのが前記の記事である。学校・学級内での浸透ぶりが見られ、書店ではすぐに売り切れてしまうことを伝えている。図書館で少年倶楽部が全て借りられていることも注目すべきであろう。少年倶楽部には魅力的な附録があり、静岡県では近所の子供をあつめ、軍艦三笠・愛国号・装甲列車模型を利用した演習もなされたが、これも結果的には宣伝活動である。

ところで附録を手に入れ作るにはどうしても購入がかかせないが、1冊の値段が50銭から60銭という雑誌を小学校高学年程度の少年が購入するには家族の理解が必要となる。次に家族との関係を投稿記事から見ておこう。

#### ◎「誌友クラブ」……家族に関する投稿記事

- ・僕は小さい時から綴方が下手で、いつも乙ばかりでした。それで父から雑誌を読み、といはれました。で、去年の八月号から少俱を読みはじめました。この頃は時々先生からお前は、此の二学期から綴方が非常にうまくなつたと言はれます。(大阪市)〔昭和7年2月号〕
- ・父も亦、愛国号の爆弾装置や発動機などに驚いて、少俱にお礼を申

---

18) 前掲13) 加藤謙一『少年倶楽部時代』。

19) 「久平新聞号外」(『少年倶楽部』昭和7年1月号)。「久平新聞」(『少年倶楽部』昭和7年2月号)。

20) 「久平新聞」(『少年倶楽部』昭和7年12月号)。

21) 前掲7) 岩橋郁郎『「少年倶楽部」と読者たち』。

- しておいてくれと言はれるのです。祖父も祖母も名ばかり聞いてみたが、今日始めて見ると言はれて大層喜んででられます。家族の者が皆少俱の為だと喜んでゐます。(愛知県)〔昭和7年5月号〕
- ・父母もこの賞品をいたゞきまして非常によろこんで居ます。父母はこれからますます少俱をとつて懸賞を出しなさいと云ひました。僕は安田保善商業学校の二年ですが、どうしても少俱を手ばなしたくはありません。母が礼状を出せといひましたからこの礼状を出しました。(東京市)〔昭和7年5月号〕
  - ・幼俱も少俱もほんとうによい本で、先生方のおかげで学校もよく出来るやうになりました。それでお父さんお母さんが少俱のおかげだと申されまして、毎月買つて下さいます。(鹿児島市)〔昭和7年9月号〕
  - ・今年の通知簿を貰つて、胸をどき〜させながら、ひらいて見ると、綴方が十点となつて居たので、おどろいて、直に家へ帰つて、お父さんに見せると、お父さんは、『これも、皆少年倶楽部のおかげだ』とお言ひになつたので僕も、本当だと思ひました。(神奈川県)〔昭和7年10月号〕
  - ・私の母も大の少年倶楽部びいきでございます。日曜日の夜母に少俱を読んであげますのも一つの楽しみでございます。母も少俱は『少年雑誌の王様だ。それと共に野間社長も雑誌王だ』と申してをります。(鳥取県)〔昭和7年11月号〕
  - ・十月号の附録の中の『乃木大将の少年時代の家』を、九月十三日の夜、ラヂオを聞きながら作りましたが、自然に涙がでさうになりました。お父さんも。お母さんも『実に良い附録をつけたものだ。床の間にかざつておけ』といはれて、よろこんで、床の間にかざりました。(東京府)〔昭和7年11月号〕
  - ・『少年倶楽部』はよい雑誌だと近所の人やお父さんやお母さんがいひます。僕はうれしくて〜たまりません。(満洲国長春)〔昭和7年12月号〕

投稿している『少年倶楽部』の愛読者は主に尋常小学校4年から高等小学校生徒と思われ、『少年倶楽部』を所有する際は家族から買い与えられるか、相応の小遣いを貰っている者が大部分と思われる。毎月50銭の少年雑誌を買い与えることが可能な家となると、それなりに財政的余裕があり、かつ雑誌に対する理解があることが前提となろう<sup>22)</sup>。

『少年倶楽部』のおかげで、成績向上や、級長選出という事例が多くみられ、そのことを家族が評価していることも購入継続の要因となっているようである。また、家族も作品を読むことで愛読者になっている点も注目すべきである。

さらに、附録は『少年倶楽部』を読まなくとも目につくものである。親たちは愛国号の爆弾装置に目をみはり、そのことで少年倶楽部をさらに評価している。同時に懸賞の評価も高く、誌友クラブへの投稿記事は懸賞当選の礼状の意味合いもある。懸賞は概ね1万人が当選するもので、号毎に変るが1等は自転車・蓄音機・望遠鏡・写真機・オルガン・映写機・野球具一揃などとなっていた。

次に、学校との関係を見ておくこととする。投稿記事には児童のほか、学校からも記事が寄せられ、少年倶楽部の教育への効果を窺うことができる。

#### ◎誌友クラブ……学校に関する投稿記事

- ・〔学校だより〕私どもの学校では児童の読書力を増さんがため高一、二、第六男其の他有志で文庫を作り、毎月少俱を購読させてゐます。さしあたって綴方、地理、理科、修身等に効果の著しきを発見し、校長先生初め諸先生迄を『やんや』させてゐます。（秋田県北秋田郡

---

22) 必ずしも裕福な子弟＝少年倶楽部の読者というわけではなく、努力により立身出世をめざす傾向が少年倶楽部にあり、そこに親・児童が活路を見出したとも考えられる。また、誌友クラブには、学校をやめざるを得なくなるなど、かつて余裕のあった生活からの変化を余儀なくされたとの記事もあるが、それでも少年倶楽部の購読を続けていることを伝えている。

- 綴子小学校 高二受持 佐々木忠蔵)〔昭和7年2月号〕
- ・僕等の教室には少年倶楽部の大附録世界地図がはつてあります。先生はいつも少俱をみなにすゝめてゐます。(大阪市)〔昭和7年2月号〕
  - ・少年倶楽部一月号の漫画愉快文庫にあつた、頓智の仲裁を磯浜小学校で十二日・十三日の学芸会にやりました。(茨城県)〔昭和7年4月号〕
  - ・さて僕等の学芸会も近づきました。よいげきもないので先生も考へていらつしやいました。僕達少俱党が先生におすすめしましてとうへ『少年間諜』(三月号百九十四頁)をやることにきめました。(三重県)〔昭和7年4月号〕
  - ・僕は少俱の歌がおぼえたかつたのだがおぼれられず此の間、力士の表紙去年の六月号を学校へ持つて行つて先生にひいてもらひました。すると先生のひいてゐるオルガンの囲りにゐた友達が一せいにうたひ出してしまひました。美しい歌だからです。否勇しい歌だからです。そして唱歌室からかへる時もうたひました。(埼玉県)〔昭和7年4月号〕
  - ・少俱三月号を校長先生にお見せしたら大そうほめて下さいました上、『少俱なくして良き少年出でず』と申されました。(愛知県)〔昭和7年4月号〕
  - ・此間、先生のご家庭訪問の時、お父さんが先生に『少年倶楽部を買つてくれと言つて聞きませんが買つてやつてよろしうございませうか』とお尋ねしてゐるのを聞いて、僕はふすまの陰で先生がどうおつしやるだらうかと思つて心配してゐますと『え、よろしうございます』とおつしやいました。其のときほど先生を有難く思つたことはありません。たつた一言だつたのですが、僕には大変有難かつたのです。僕等の学級でも学級雑誌として大変くわんげいされてゐます。(福岡県)〔昭和7年6月号〕
  - ・この頃僕の組で『ナポレオン』の課を教はつた時、僕は少俱の附録

のナポレオン名画集を先生にあげるとすぐ教室の後にはつた、そして説明をしてくださつた。その時僕は嬉しさのあまり、下をむいて説明をきいた。（長野県）〔昭和7年8月号〕

- ・〔御礼〕本紙七月号の口絵、真柄直隆と勾坂吉政の一騎討は私の郷土に最も関係の深いもので何より嬉しく思ひました。（中略）あの絵で特に感心させられたのは五尺三寸の大太刀も勾坂の十文字の槍も史実（浅井三代記）の通りで、その上背景の姉川、龍ヶ鼻、七尾山等実景そのまゝではありませんか。我が校では講堂にかかげて永く保存したいと思ひます。このやうな名画をおのせ下さつた事を厚くお礼申し上げます。（滋賀県 小谷小学校訓導 岩田利雄）〔昭和7年8月号〕

昭和7年4月号には「並んだ！並んだ！附録の大模型」という記事に、福岡市大名小学校の愛読者たちが、戦艦三笠・名古屋城・エンパイヤビルの模型を持ちより学校で写した記念写真が掲載され、生徒100名以上が並んでいる。この送られた記念写真を見て、編集部は無事三笠が子どもの手で組み立てられたことを確認でき安心したという<sup>23)</sup>。こうした写真は学校の理解がなければ撮影は無理であり、少年倶楽部の普及とともに学校内へ浸透していく様子は注目される。附録は教育現場でも活用され、大附録の世界地図や附録のナポレオン名画集を教師が教室の後ろに貼った行為は、附録が教室での「掛図」の役割を果たす好例である。

本誌の作品群はどうか。読書力の向上にも少年倶楽部はその効用があり、綴方などの成績の向上が見られるという。また、学芸会の題材に少年倶楽部掲載作品がとりあげられる点も学校への浸透ぶりを裏づけている。

教師が少年倶楽部を薦めている事例も興味深い。家庭訪問の際に児童の父が教師に少年倶楽部を子どもに買ってやるべきか伺いをたてそれを教師

---

23) 前掲13) 加藤謙一『少年倶楽部時代』。

が快諾していることについて、陰で聞いていた生徒の感謝のほどはいかばかりであろうか。また、昭和7年9月号に掲載された「私が少俱の愛読者となるまで」には、教師が東京土産として『少年倶楽部』『少女倶楽部』をクラスに提供し、それを廻し読みした生徒が購読を決意し、家の手伝いを毎日続けて二銭ずつ貯金して毎月購読することができた経緯が書かれている。

『少年倶楽部』と家庭・学校との関係は岩橋郁郎が分析しており、『少年倶楽部』が家庭・学校に認められ、それらのリアクションには学校という公権力や家庭への認知が存在することを指摘している<sup>24)</sup>。『少年倶楽部』が広く社会に浸透したのは、その中の教育的な内容が附録や図画などが読者にわかりやすく、さらに目にみえる形で家庭や学校にも認知されるという、相乗効果が大きくなった面もあるように思われる。そのことは同誌への読者投稿などからその傾向が確認できるのである。

## 2 満洲事変期の『少年倶楽部』

### 1) 満洲事変を伝える『少年倶楽部』

満洲事変は昭和6年（1931）9月18日の柳条湖事件をきっかけとして発生し、昭和7年1月には関東軍がハルピンを占領、3月に満洲国建国を見た。柳条湖事件は関東軍の謀略で始まったのであるが、国民はその事実を知らされることはなく、「中国側の南満洲鉄道線路の爆破」に対する正当防衛の戦いが満洲事変であると信じていた。『少年倶楽部』昭和6年12月号には以下の記事が掲載され、満洲事変を伝えることとなった。

◎池田宣政「満洲事変はなぜ起つたのでせう？」（『少年倶楽部』昭和6年12月号）

---

24) 前掲7) 岩橋郁郎『「少年倶楽部」と読者たち』。

『お父さん、どうして日本と支那とは仲が悪いんでせうね』

〔中略〕

『仲が悪いのぢやなくて、一方だけ悪いんですね』

『さうだ、日本と支那もそれなんだ。日本では、どうかして支那と仲善しになりたいと考へてゐるのに、支那が意地悪なことばつかりしてゐるのだ』

『どんな意地悪なんです？』

『たくさんある。数へきれないほどある。日貨排斥といつて、日本から支那に輸出した貿易品を買はない相談をして日本を困らせたり、その貿易品を勝手に差押へて、代金も払はなければ、品物も返さないやうな乱暴をするのだ。今年七月中頃から八月中頃までの、僅か一月の間だけでも、かうして支那の役人に差押へられた日本の貿易品の代金が、五十万両以上にのぼるといふことだ』

〔中略〕

『支那兵が南満洲鉄道を破壊したんでせう』

『さうだ、九月十八日に北大營といふ土地で支那兵が鉄橋を破壊し、日本の守備兵を襲撃したのだ。守備兵はすぐにこれと応戦して、はげしく戦つたのだ。これが満洲事変のはじまりなのだ。この時から日本と支那の軍隊は、各地で衝突して激しく戦つたが、さすがに日本軍だ、僅の兵数で支那の大軍を対手にして少しもひるまずに、十九日には奉天を占拠してしまつた。そして翌日は鳳凰城、寛城子などの町を攻め落してしまつたのだ』

昭和7年3月1日、満洲国の建国が宣言され、9日に清朝最後の皇帝溥儀が執政に就任した。しかし、軍事・外交および内政の実権も関東軍や日本人官吏がにぎる、日本人が事実上支配する傀儡国家であった。9月15日に日本は満洲国を正式に承認したが、中国政府は満洲事変を日本の武力侵略として国際連盟に訴え、リットン調査団が満洲に入り現地調査を行った。

昭和8年2月24日の国際連盟総会で、満洲国占領の日本軍撤退などをもとめる勧告案が可決されると、日本は国際連盟を脱退した。

## 2) 満洲事変記念特大号

満洲事変展開中の昭和7年(1932)1月11日、『少年倶楽部』昭和7年2月号が書店に並んだ。この号は「満洲記念特大号」と題し、巻頭・附録・各種特集などを満洲事変一色にそめるものであった。その関係記事をまとめると次のとおりになる。

### ◎『少年倶楽部』「満洲事変記念特大号」昭和7年2月号

#### ○目次(満洲事変関係記事抜粋)

表紙	「少年飛行士」	斎藤五百枝画
折込口絵	「敵の装甲列車を攻撃する我が飛行機」	鈴木御水画
目次カット	「ラグビー戦」	廣瀬貫川画
満洲事変画報	「北満の荒野を進む我が騎兵隊」	樺島勝一画
	「悲壮なる経理官の全滅」	伊東幾久造画
	「軍旗のもとに」	樺島勝一画
	「我が軍の総攻撃」	村上松次郎画
	「日本と支那の兵隊の服装」	樺島勝一画
僕等は目の前に満洲事変を見た		満洲の小学生
	「早く仲よしに」	奉天弥生尋常小学校 尋五 平田 稔
	「電報に泣いた曹長さん」	奉天弥生尋常小学校 尋四 森 温子
	「北大営」	奉天春日尋常高等小学校 尋五 尾川常夫
	「ありがたい兵隊さん」	奉天春日尋常高等小学校 尋五 木谷妙子



満洲事変美談集

報知新聞特派員航空兵中佐

安達堅造（金子士郎画）

「恩を忘れぬ支那学生」

「死ぬまで機関銃を守る」

「戦場で射撃を習ふ」

「死すとも縋帯を離さず」

「敵の砲で城門を爆破す」

戦場哀話

「軍犬の戦死」

中根榮

少年団の見てきた満洲戦地の話

隊長海軍大佐原道太

「活躍した長春の少年団」 少年団員 三橋時春

「チチハルに翻る日章旗」 少年団員 廣瀬武弘

「お守の手紙」 少年団員 佐野明德

「手帖から」 少年団員 瀧中孟雄

（その他関係記事）忠烈山田一等兵（久米絃一，伊幾久画）／軍馬の唄（サトウ・ハチロー，川上四郎画）／満洲の支那兵（歩兵少佐今村嘉吉，馬場射地画）／満洲の猿蟹合戦（陸軍省調査班）／陸軍だより

このなかで満洲事変はどう伝えられたのか，この一例として満洲の猿蟹合戦をとりあげる。これは満洲事変の状況を猿蟹合戦に見立てた漫画を描いて説明するものであった。

### ◎満洲の猿蟹合戦

- (一) 日本蟹は日清戦争に勝つて，握り飯（遼東半島）を得た。
- (二) 支那猿はこれが欲しさにロシヤ熊，ドイツ狼，フランス虎にたのんでとりかへした。その代り日本蟹がもらつたのは柿の種（日露戦争）であつた。
- (三) 日本蟹はこの柿の種を植ゑるのに10万人の生命と20億円のお金を費した。

- (四) その種から出た芽（南満洲）を育たせるために日本蟹は15億1千万円といふ沢山の肥料をやつた。
- (五) 肥料がよかつたので、柿は大きくなつた。そして見事な実がなつた。
- (六) 支那猿は又この柿の実が欲しくなつて横取りしようと、南満洲鉄道の近くに競争鉄道を敷いて日本蟹を困らした。
- (七) 支那猿はそれでも足りずに、日本蟹を追ひ出しにかゝつた。それが無法な排日となつた。
- (八) 支那猿はまだ飽き足らず、柿の木を切り倒さうとした。それが奉天北方の鉄道破壊で満洲事変のはじまりだ。
- (九) 日本蟹はとうへ怒つた。そして猿の赤い尻を突き上げた。それが9月18日夜の関東軍の活動だ。
- (十) 支那猿は自分の悪いことはいはず、ライオンや虎なぞの会議（国際聯盟）へそれを訴へた。
- (十一) しかし日本蟹は、昔の親蟹のやうに猿に叩き潰されない為には、その生命である満蒙を固く守らねばならないのだ。

すなわち、日清戦争・三国干渉・日露戦争といったこれまでの満洲をめぐる情勢をまとめ。さらに日本軍（関東軍）の主張通りの満洲事変を簡単にわかりやすく紹介するものであった。

このほかの記事の多くは紙数の都合で紹介を割愛せざるを得ないが、読者と同年代の「少年少女」の記した記事について参照したい。まず、満洲の地にいた小学生の記事の概略を紹介する。

◎少年少女の綴り方「僕らは目の前に満洲事変を見た」

- ・奉天弥生尋常小学校 尋五 男「早く仲よしに」  
→「支那の悪い兵隊」との戦いを強調、東洋の平和を願う。
- ・奉天弥生尋常小学校 尋四 女「電報に泣いた曹長さん」

- 自宅に宿泊した曹長が、行方不明になった同僚の家族からの電報に接する様子を綴る。
- ・奉天弥生尋常小学校 尋五 男「北大営」
  - 事変直後の北大営の様子を綴り、日本兵が支那兵を弔う様子を紹介する。
- ・奉天弥生尋常小学校 尋五 女「ありがたい兵隊さん」
  - 満州の兵隊のようすの伝聞を綴り、兵隊さんのおかげで安心して勉強していると伝える。

これらは、満洲に在住している奉天弥生尋常高等小学校・奉天春日尋常高等小学校などの児童が綴り方を投稿し、それらが編集の過程で選択されて掲載され、「僕らは目の前に満州事変を見た」という綴り方のコーナーを構成している。少年倶楽部は満洲にも読者がおり<sup>25)</sup>、そこからの読者投稿を通じた少年倶楽部とのネットワークがあったことから、綴り方投稿の企画も早期に行ない得たと思われる。文章を見ると、児童の自宅に宿泊した曹長が行方不明になった同僚の家族からの電報に接して泣く様子、砲声や大きな地響きの様子及び日本軍が占領した北大営の見聞録など、満洲の児童の目から見た事変の様子を伝えている。

満洲の少年団が負傷兵の救護や憲兵隊の手伝いなどで活躍している様子については、日本から満洲へ訪問した内地の少年団が伝えている。次に内地の少年団が満洲を訪問した際の記事を見ておこう。

#### ◎少年団の見てきた満洲戦地の話

- ・活躍した長春の少年団（内地の少年団が、満洲長春の少年団より話を聞く）

---

25) 前掲7) 岩橋郁郎『少年倶楽部と読者たち』。なお、昭和5年2月から6年12月まで満洲（関東洲を含む）から少年倶楽部への投稿は5件がみられる。また、昭和7年5月号の大懸賞当選者発表のうち5等「満洲」欄は5名、6等「満洲其他」欄は136名であった。

→北大營で日支両軍が衝突した際、少年団は手旗で軍と通信をし、水を届けたり応急手当をした。

・チチハルに翻る日章旗（チチハル占領時の美談）

→多門師団・長谷部旅団がチチハル市街に乗り込むと、日章旗が翻っていた。軍隊は元気百倍となり城内へ突進し、予定より早くチチハルを占領した。この日章旗は引き揚げるはずの満鉄公所の社員が、日本軍のチチハル附近進出を聞いて、密かに領事館のテーブルの下に隠れて、夜明けとともに危険をおかして国旗を掲げた。

・お守の手紙（チチハルから奉天へ向かう汽車での少年団員と兵隊の会話）

→兵隊は両親からの手紙や慰問袋の手紙をヘルメットや腹巻の中に入れていた。そうした国民からの後押しがあるから弾丸はあたらないうという。

昭和6年11月16日、満洲への慰問などを目的として、全国各地の少年団からの21名の団員と少年団長三島通春以下5名が東京を出発、大連上陸後は奉天から2隊にわかれ、1隊は長春・吉林・ハルビン、1隊はチチハルを訪問した。この間、各地で軍隊や日本の人たちを慰問あるいは手伝いなどをして、12月7日帰国した。日本軍のチチハル占領は11月19日、少年団のチチハル訪問は11月26日なので、戦塵まださめやらぬ時期であった。

満洲事変記念特大号を編集している時期は、関東軍が各地を占領し続けている段階で、発行時に大勢は決していた。また、満洲訪問の少年団が帰国した時期でもあった。

特大号は日本軍（関東軍）が引き起こした満洲事変を正当化しつつ読者である子どもたちにわかりやすく伝えるというスタイルをとっていた。その主な手法は三つにまとめられる。

一つには、少年少女の綴り方を利用していることである、満洲の児童の目から見た事変の様子を伝え、内地の児童たちへの事変への共感を呼びかけているようにもとれる。

二つには、「美談集」として、戦争の中の一方向「真実」を軍記物風に書き上げているところである。少年倶楽部には子母澤寛などの剣客小説があったことから、児童は興味を持って読めたことであろう。「死ぬまで機関銃を守る」、「死すとも縋帯を離さず」などのキーワードは、「男の子を男らしく育てる」という少年倶楽部の愛読者である児童の心に響いたことであろう。

三つには、昔話を利用していることである。満洲事変の状況を猿蟹合戦に見立てた漫画を描いて説明しており、日本は蟹、中国は猿にみたとられ、日本の生命線である満蒙を守らなければならないことを呼び掛けている。

### 3) 誌友クラブにみる少年たちの接した満洲事変

「満洲事変記念特大号」の他の号でも『少年倶楽部』は満洲事変を取上げ続けた。昭和6年12月号は「満洲事変特別号」と題し、満洲事変関係大地図や「満洲事変写真画報」、坂部護郎「倉本大尉の討死」、池田宣政「満洲事変はなぜ起つたのでせう？」という記事を掲載した。昭和7年3月号は満洲事変記念誌はがき集と満洲物産早わかり地図が附録であり、佐藤保太郎「驚くべき満洲の富」などが掲載された。4月号には加藤少佐「愛国号を迎えて感激に湧く満洲」、平山蘆江「満洲話の種」、編輯局「大満洲国が生まれました」、編輯局「上海事件」などが掲載された。5月号には長春橋頭小学校「満洲だより」という満洲の小学生から内地の少年へ宛てられた綴り方や、平田晋策「日本もし戦はば！」が掲載された。6月号には平田晋策「若し日本が敵の飛行機に襲はれたら」が掲載され、アメリカを仮想敵国として帝都の防空の重要性を訴えている。7月号と8月号には平田晋策「風雲暗し十年後の満洲」が掲載され、読者が成人になった時代の日本軍が満洲の野で戦うことを書いていた。

こうした満洲事変の記事に対する少年たちの反響はどうであったのか。「誌友クラブ」から満洲事変に関わる反響について抜き出してみるとする。

◎誌友クラブより満洲事変記事抜粋

○昭和7年1月号

- ・十二月号は満洲事変についての本なのでいつまでも記念すべく取っておかうと思ひます。それに重細重の曙，少年聯盟，村の少年団等いつもすばらしいですね。(東京府)
- ・附録の満洲事変の地図はすばらしいですね。親類の軍人が来て非常にうまく教へてあると話してくれました。(大阪市)
- ・又学校で先生が少俱の中にある「満洲事変はなぜ起つたのでせう」をよまれて『これはなかへうまくかいてある。子供によくわかる』とおつしやつてみんなのまへで読まれました。(福井県)

○昭和7年2月号

- ・この間僕の学校で満洲出征軍人に送る慰問文を作らされましたが少年倶楽部のおかげで代表に当選しました。(大阪市)

○昭和7年3月号

- ・今度の満洲事変記念号は居ながらにして満洲における我が軍の活動が知られ感激せずにはゐられません。(東京府)
- ・僕の兄さんは、この度の満洲事変で出征して居た所、十一月十八日、三間房の激戦で戦死をとげました。兄さんも僕位の時熱心な少俱の愛読者で、入営する前まではキングをよんで居りました。どうか記者先生少俱愛読者の先ばいから、名誉の戦死者が出たのを喜んで下さい。(福島市)

○昭和7年4月号

- ・お父さんも『今度の附録は大へん為になるよい附録だ』と言つて賞めていらつしやいました。中にも満洲物産地図を大へん賞めて、『満洲の様な豊かな処に行つて思ふ存分働いて見たい』とおつしやつて居ます。(鹿児島市)
- ・満洲物産早わかり地図は学校へ持つて行くと先生は、『これは地理の産業に大へん役に立つ』と言はれて、地理室の後にはつて下さ

いましたので僕は大へんうれしく思いました。（高知市）

・三月号を手にして『満洲物産地図』の美しく、且つわかり易いの  
に驚きました。（石川県）

○昭和7年6月号

・『日本もし戦はば』あの記事を読んだ時、僕は我が海軍の威力を  
知る事が出来ました。時節柄あんな記事が沢山発表される事を希望  
してみます。（鳥取市）

○昭和7年10月号

この頃しきりと戦争の話が伝へられる。話はだん――大きくなつて、今にも日本が世界を相手に大戦争をはじめるやうな事までいはれてゐるやうである。どこまでが本場で、どこまでが思ひ違ひなのか、誰にもわからない。わからないが、とにかく町の人も村の人も、戦争の話である。

満洲事変以来、我が日本の国が世界の各国から非常に気をつけて見てゐられる事はたしかである。中には、日本の本当の気持がよくわからずに何か文句をつけたがつてゐる国もないではないやうである。

非常に大事な場合である。日本はじまつて以来、今日程大事な時はないとさへいはれてゐる。日本人全体心を協せ、男も女も、大人も子供も、一心不乱に日本の国を思ふ時である。この日本の為に勉強するのだ、この日本の為に身体を鍛へるのだ、この日本の為に困難と闘ふのだ、何もかもこの日本の為にと覚悟してかゝる時である。この覚悟さへあれば、たとへ世界のどこの国の人がどんな思ひ違ひをしようと、少しも心配はない。（記者による囲み記事）

まず附録についての感想を見ておこう。昭和6年12月号や7年3月号の附録の地図が好評であったことがわかる。3月号の「満洲物産早わかり地図」は満洲の地の豊富な資源が一望できるもので、満洲の地を死守する必

要性がまさに「早わかり」となっていた。

昭和7年2月号「満洲事変特集号」の感想としては、満洲事変での軍の活動がよくわかったことや、少年倶楽部の読者であった兄の戦死についての紹介があった。

これら投稿記事の中には学校が満洲事変とどうかかわっていたかも見て取れる。「満洲物産早わかり地図」は親や教師の評価も高く、教師の手で地理室の後ろに貼られた。また学校では満洲出征軍人におくる慰問文が作られていた様子が見える。

昭和7年10月号には記者の投稿記事が掲載され、満洲事変以降の戦争への覚悟を呼びかけるなど、戦時体制への移り変わりの端緒が見てとれる。

『少年倶楽部』が満洲事変をどのように伝えたかについては、成田龍一が指摘している<sup>26)</sup>。物語を写真で補完し実際の出来事と混在させる手法をとる。また日本軍人の勇猛さ、使命感の強さなどを「美談」としてとりあげ、出来事と読者との距離を縮め、少年たちをそこに没入させる。さらに視覚的な画による知識と結びつけられナショナリズムが定着していくとしている。金山泰志は、『少年倶楽部』の満洲事変関連記事から中国側に対する否定的語句（「意地悪」「乱暴」「無法極まるふるまひ」）が多く使用されていたことに注目し、その野蛮性の認識が読者に共有され、在満洲の少年少女の綴り方「僕等は目の前に満洲事変を見た」の表現に現れることを指摘している<sup>27)</sup>。

本章でも『少年倶楽部』が満洲事変をどう伝えたかを確認するとともに、読者欄をもとにして、満洲事変関連記事に対し少年たちがどのように反応したかを考察した。「満洲事変記念特大号」などは特集記事を通じて満洲事変の正当性を児童に伝えている。また、連載の小説などにも満洲事変についての記述が顕れる。例えば山中峯太郎「大東の鉄人」には、「……石炭、

---

26) 前掲8) 成田龍一「少年雑誌のなかのナショナリズム—『少年倶楽部』の世界」。

27) 前掲10) 金山泰志「一九三〇年代の『少年倶楽部』に見る日本の中国観」。



鉄、金、石油、塩、そのほか、米も、豆も、小麦も、満洲国は赤ん坊だが色んなものを持つてゐる。この赤ん坊を、大事に守つてゐるのは、我が日本だ。日本と満洲は仲よく一緒に榮えて行かうとする。ところが、日本が榮えて今より強くなるのを、むやみに恐がつてゐるのは、第一に米国だ。第二に支那、ロシア、英国、皆が恐がつてゐる。そこで満洲国を今のうちに、つぶしてしまつて、日本を弱くしようとする」とある<sup>28)</sup>。

以上からは、小説・綴り方などを通じて一面の眞実を伝えつつ、さらに日本軍による中国側が日本の「生命線の根幹である満鉄線を不法・卑劣にも破壊した」ことに対する正当防衛が満洲事変であるという、軍隊・政府・新聞マスメディアの主張に追随した様子がわかる。読者投稿からうかがえる反応は少ない事例ではあるが、様々な形で満洲事変支持の反応があったことが確認できる。また『少年倶楽部』昭和7年2月号に掲載された在満洲小学生の綴り方も「かうした国と日本はどうして戦つたのでせう。それは支那全体との戦ではなく、悪いこれらの兵隊との戦ひです。(中略)支那は戦では勝てないので国際聯盟に持ちだした。支那は口先でごまかさうとしたが出来なかつた」「『国際連盟』の人もまだ満洲のやうすをしらんのだ。今に日本の正義が勝つて支那の不正義が負けるのだ」などとある。これらの記述には「鉄道はこはす、わが住民には乱暴をする、しまひには、わが守備隊の兵士に向つて銃砲をあびせる—かうした支那兵の無法極まるふるまひに、わが軍も是非なく起つて、これを鎮めねばならなかつた」(「倉本大尉の討死」)や「『……戦争では勝てないので、また日本の悪口を世界中にひろげはじめた。お前、国際聯盟の理事会といふのを知つてらう』(中略)『……その聯盟理事会へ、支那は早速この事件を持ち出したのだ……』(中略)『……日本が悪いのではなく、悪いのは支那だといふことがわかつたので、理事会は支那の申し出をびたりとことわつてしまつたのだ』(「満洲事変はなぜ起つたのでせう」)という、『少年倶楽部』昭和6

28) 『少年倶楽部』昭和7年9月号。

年12月号を参照したかのような傾向が見てとれる。満州事変は国民の圧倒的な支持を受けていたが、『少年倶楽部』も世論の醸成の一翼を担っていたことが確認できる。

### 3 「軍国少年」の誕生と「少年兵」への誘導

#### 1) 陸軍少年兵とは<sup>29)</sup>

日本の軍隊で、徴兵年齢以前の10代の「少年兵」が出現するのは昭和初年で、『少年倶楽部』隆盛の時期と重なる。第一次世界大戦で戦車・飛行機・通信機など数々の新兵器が出現し、それをあやつる技術下士官が求められた。この養成には頭のやわらかい少年を教育するのが効果的だとされ、陸軍は昭和8年(1933)の陸軍少年通信兵(陸軍通信学校生徒隊)をかわきりに少年兵制度を発足した<sup>30)</sup>。志願資格は満15歳以上18歳未満で、主として次の兵種の少年兵が誕生した。

陸軍少年通信兵 (陸軍少年通信兵学校)

陸軍少年飛行兵 (東京陸軍航空学校)

陸軍少年戦車兵 (陸軍少年戦車兵学校)

陸軍少年野砲兵 (陸軍野戦砲兵学校)

陸軍少年重砲兵 (陸軍重砲兵学校)

陸軍少年高射砲兵 (陸軍防空学校)

陸軍少年兵技兵 (陸軍兵器学校)

---

29) 『陸軍少年通信兵学校』(東村山ふるさと歴史館, 2008年)。拙稿「旧跡「東京陸軍少年通信兵学校跡地」について」(『東村山市史研究』第21号, 2012年)。

30) 三塚毅『陸軍少年兵たち 少飛～陸幼生の総合資料』(少飛文献調査室, 2005年)。なお、海軍の少年兵は、甲種飛行予科練習生(昭和5年創設)、乙種飛行予科練習生(昭和13年創設)、丙種飛行予科練習生(昭和15年創設)、乙種飛行予科練習生(昭和18年創設)、少年水測兵・海軍機雷学校(昭和16年創設)、少年電信兵・海軍通信学校普通科電信術練習生(大正12年創設)などがあった〔逸見勝亮「少年兵史素描」(『教育史学紀要』巻33, 1990年)〕。

＊学校名は昭和17年以降のもの

「少年〇〇兵」はあくまで通称であり、正式には「〇〇学校生徒」と呼ばれた。彼らは陸軍少年通信兵学校といった各指定校に入り、在学中は準軍人扱いの陸軍生徒であった。

少年兵には応募が殺到し、兵種によっては倍率150倍にのぼるものもあったという<sup>31)</sup>。大きな理由として、当時国民皆兵の時代であり、20歳（のち19歳）になれば徴兵されるので、少年たちは歩兵二等兵でしごかれるよりも、下士官以上確実な少年兵への応募を選んだという。また、太平洋戦争中の時期になると、国民学校を卒業した少年たちに職業選択の自由はなく、勤労働員で労働環境劣悪な工場へおくられ、危険と隣り合わせになる場合もあった。この制度を利用すればある程度希望の兵種を選ぶことができ、全額官費で技術を習得することが可能なことも、応募が殺到する理由の一つであった<sup>32)</sup>。

2) 少年兵志願と『少年倶楽部』

『少年倶楽部』の目次は折込になっており、その裏面の広告の中に、「陸軍海軍少年航空兵受験講習録」がある。この宣伝文句として「小学卒業丈の学力で将来立派な飛行将校となれる青少年の活舞台が開かれた。天晴！空の勇士となつて日本男子の本懐を達せよ」と書かれている。これは昭和7年の各号に見られるものである。また、昭和7年6月号には「少年航空兵になるには」という記事が掲載された。

◎横澤豊彦「少年航空兵になるには」〔昭和7年6月号〕

晴れた空の光、蒼く波うつ海、海、その海を圧して堂々と浮ぶ軍艦の列。横須賀は見るからに勇ましい海軍の港だ。そこには又、帝国の

31) 『軍服の青春<陸軍編>』（ノーベル書房、1979年）。

32) 東村山ふるさと歴史館企画展「陸軍少年通信兵学校」における「少年通信兵調査票（証言集）—受験から入校まで」による。

誇り、横須賀海軍航空隊がある。

僕は弟と昨日の日曜を幸ひ、その航空隊に親友の南一夫君をおとづれた。南君は今年十七歳の少年航空兵だ。

（中略）

『毎年何人ぐらゐ採るの？』

『百五六十人。昭和五年から始めて、やつと今年で三年目だからまだ〜有望だ。昭和五年に七十九名、六年に百二十七名、今年の六月に又百五六十名入るだらう。試験を受けて及第すれば、ちゃんと知らせが行く』

『ね、僕なりたいな。僕丁度十五だ。大正七年十二月二日生れた。今年の十二月一日には満十五歳だ』弟はスツカリもう少年航空兵にきめたらしい。

『なりたまへ〜。君なら大丈夫だ。おまけに月謝なんかいらすさ。何から何まで海軍でしてくれるんだ。僕等こんなに若くても。ちゃんと海軍の水兵と同じに月給をもらつてゐるんだよ。月給をもらつて勉強してるんだから、偉いもんだらう。ハハ、ハ、』

『それで少年航空兵をすましたら？…』

『もちろんすぐ海軍の軍人だ。採用されれば直ぐ海軍四等航空兵、それから一年級進む毎に昇つて卒業の時は海軍三等航空兵曹だ。それから順々に少尉までなつて、そのさきは本人の力次第、勉強次第で中佐にでも大佐にでもなれる』

『しめた！ 僕ダンゼン少年航空兵、おつと予科練習生にきめた。すばらしいな。日本少年の花だね』弟はすっかり嬉しさうだつた。南君はそれからそれへと、愉快的な少年航空兵の話をつづけた。

何でも今年志願出来るのは、大正五年十二月三日から、大正七年十二月二日の間に生れた少年なら、誰でもいいとのことだ。

前述のとおり、昭和7年6月号には平田晋策「若し日本が敵の飛行機に

襲はれたら」が掲載され、さらに「我が空軍所在地早わかり」の地図が掲載された。この地図は日本における海軍の6つの航空隊、陸軍の3つの飛行学校および1つの気球隊と8つの飛行聯隊の所在地が一目でわかるものであった。

もともと『少年倶楽部』には各種講義録・各種学校受験案内の類の広告が掲載されており、「少年から短期独学で一躍判任官」（普通文官講義）、「独学で早く立身成功ができる」（中学全科講義録）、「学校に行かない者は中学を家庭で仕事の余暇に学べ」（速成中学講義録）、「立身出世鉄道就職の早道」（鉄道員受験就職講習録）など<sup>33)</sup>、経済的ハンディを個人の努力で克服できる道を提示されていた。また、軍隊への入隊も立身出世の道の一つであり、特に少年航空兵ともなれば、最新兵器を自在にあやつる、『少年倶楽部』掲載の作品さながらの道を選択することにもつながる、まさにあこがれの存在でもあった<sup>34)</sup>。また、「自分も続く」とばかりに満洲事変などに刺激を受けた敵愾心の発揚の場としても機能したであろう<sup>35)</sup>。前掲「少年航空兵になるには」では、書き手の友達が少年航空兵で、書き手の弟と一緒に話を聞いて志願を決めるという想定であり、まさに読者に隣接する存在が、「少年兵」である手法が取られている。『少年倶楽部』の読者の年齢は、「少年兵」に志願できる年齢とも重なっていた。

逸見勝亮は、少年兵募集の展開の手段として新聞広告や各種志願読本、

33) 『少年倶楽部』昭和7年正月号・2月号ほか。

34) 兵器もしくは兵器につながるものが登場する例を『少年倶楽部』昭和6年6月号を見ると、「空をゆく大和魂」（戦闘機、攻撃機、航空母艦）、「武士道の華久我少佐」（機関銃）、「亜細亜の曙」（飛行船、戦闘機）、「少年聯盟」（伝馬船、汽船）、「のらくろ上等兵」（機関銃）がある。

35) 一例をあげると、「若し日本が敵の飛行機に襲はれたら」には『僕、きつと強い〜飛行将校になります。そして僕がまだ少年のうちに、敵の空軍が東京へ来たつて、決して怖がりません。防空監視隊か消防隊のために、勇ましく働いて、日本少年の強さを敵に知らしてやりますよ』との少年の言葉を記載している（『少年倶楽部』昭和7年6月号）。

『少年倶楽部』などの雑誌を重ねてみると、「1942年以降の少年は、少年兵とりわけ少年飛行兵と航空機の情報の渦の中にいたことを強く思わざる得ない」とするが<sup>36)</sup>、昭和7年頃の『少年倶楽部』にはその萌芽が見られた。「立志出世」を掲げた『少年倶楽部』が次第に軍事色を帯び、選択肢としての軍隊が、小学校卒業後の道としてクローズアップされるようになり、軍と少年との「需給」が一致していくようになるのである。

### おわりに

以上、国民に戦争を支持する心性があった点を、『少年倶楽部』とその愛読者である「少年」に着目し、満洲事変をめぐる昭和7年(1932)中各号の『少年倶楽部』を取上げた。

『少年倶楽部』が広く社会に浸透したのは、その中の教育的な内容が家庭や学校にも認知され、読者・家庭・学校の相乗効果が大きくなった面もあるように思われる。同誌への読者投稿などからその傾向を確認した。また、満洲事変記事の概要と、それに対する反応(読者投稿・綴り方など)を紹介し、同誌と読者が満洲事変を支持するという様相の一端を明らかにした。

『少年倶楽部』は「男らしく」「偉大な人になること」という編集方針を有し、それに添った作品が少年たちの心性に大きな影響を与えていた。「立志出世」の一つに軍隊に入るという道があり、満洲事変が雑誌のコンテンツとして登場すると、その道が次第に太くなる傾向の一端を明らかにした。満洲事変をきっかけとするのは言い過ぎの感があるが、昭和6年11月号が「立志出世号」で12月号が「満洲事変特別号」なのは示唆的である。

さて、「もし日本戦はば」や「風雲暗し十年後の満洲」が予言していたかのように、「満洲事変記念特大号」を読んだ少年たちは青年となって日中全面戦争や太平洋戦争を戦わなければならなくなった。おそらく読者の

---

36) 前掲30) 逸見勝亮「少年兵史素描」。

うち「新兵器」を操った者もあったであろうが、それは戦争のリアルの前に埋没する存在でしかなかった。

付記

本稿は、2018年12月20日の中央大学政治学研究会で発表した「満洲事変期の『少年倶楽部』」に、廣岡ゼミで発表した内容などを加えて、今回の退職記念号に寄稿したものである。

（本学政策文化総合研究所準研究員）